

箱根フリー切符の旅 2019



2019年3月

旅のチカラ研究所 植木圭二

早春の箱根に小田急の箱根フリー切符を使って2日間旅をしてきた。メンバーは高校時代のサークルの仲間たちで、みんな還暦を越えている。そんな中高年向けにフリー切符で回る箱根の旅は快適かつ興味深い。

■ロマンスカー

集合は青いロマンスカー「メトロはこね」の車内、切符は事前に参加者に郵送してある。

この電車は北千住から地下鉄千代田線経由で箱根湯本まで約2時間で運転している。途中のいくつかの停車駅で参加者が乗ってくれば箱根湯本で全員そろろうという集合方法だ。

ロマンスカーという新しいような古いようなこの不思議な名前は、2人掛け座席を指す和製英語の「ロマンスシート」から始まっている。英語では「Love seat」と表現するらしい。

昔の列車といえば4人1組の向かい合わせで木製の固いボックス席が頭に浮かぶ。そこに2人単位で前を向いて座るロマンスシートを1927年に初めて採用したのが京阪電車で、その電車をロマンスカーと命名し、以後は鉄道各社でロマンスカーという呼び名が流行した。

その後鉄道各社は独自の名前を用いるようになり、ロマンスカーという表現はあまり用いられなくなった。しかし小田急だけは使い続け、他社がロマンスカーという名前を全て使用しなくなった1991年に小田急がロマンスカーを商標登録した。従って現在は小田急だけがロマンスカーを名乗ることが出来る。

ロマンスカーでロマンスが生まれることもある。

私の友人で、新宿から乗って偶然隣り合わせた女性に話かけて交際に発展し結婚にまで至った輩がいる。いわゆる「車内ナンパ」だが、なぜかロマンスと言うと聞こえがいい。

さて、今回一緒に旅するのは高校時代に同じサークルだった仲間たち5人で、みんな45年前は高校生だった。そして私以外の4人は女性だ。実は半年前にも同じメンバーで旅行に行っている。その様子は旅行記「伊豆大島の旅 2018」に書いている。

そのサークルは市内のいろいろな高校生が自主的に参加する集まりで、男子校だった私にとっては他校それも女子高校生と話ができる貴重な機会でもあった。そういうサークル活動は当時も今も珍しいだろう。

ひょっとしたらサークル活動は今も続いており、今回の旅もそのサークル活動の一環ということになるかも知れない。だったらロマンスシートの意味もありそうだ。

しかし現実にはロマンスシートではなく、そのシートを向かい合わせにしたボックス席に陣取っているのは4人のおばさんたちで、私は通路を挟んだ隣の席にひとり座っている。

そんな中、今日の予定を相談しようとするが、彼女たちは高校時代の恋愛話で盛り上がっていてそれどころではない。45年経っても仲間と旅に出て電車に乗れば、おばさんたちの気持ちは完全に女子高校生に戻っている。これがまさしく「ロマンスカー」なのだろう。

従って、これからの予定は完全にお任せモードで、私は専属の添乗員と化している。

まあ、それもいいか。箱根フリー切符を持っているのだから気ままに行こう。



■箱根登山鉄道

箱根湯本で箱根登山鉄道に乗り換える。この登山鉄道はロマンスではなく、鉄道に賭ける男たちのロマンがいっぱい詰まっている。

箱根登山鉄道は日本で最も急こう配な路線で、建設にあたってスイスのレーティッシュ鉄道に多くを学んでいる。その縁で姉妹鉄道提携を結んでいるおり車内にはレーティッシュ鉄道のポスターが数多く貼られている。乗客も半分くらいは外国人なので、スイスの登山電車に乗っているような気分になる。

急こう配の対策にはスイッチバックを用いており、電車は一旦停止すると運転手先頭車両から最後尾の車両へホームを小走りで移動して最後尾の運転席に座り反対方向に発車する。

3カ所にスイッチバックを設けることにより最急こう配は80パーミルに緩和されたというが、80パーミルとは1000m進む間に高低差が80mになるというもので、これはレールを固定せずに枕木の上に置いただけでは自然に下に滑り落ちてしまうほどのものだという。歯車やケーブルに頼らない鉄道としては日本で最も急で、世界でも類を見ないらしい。

この登山鉄道の建設当時において日本における最急こう配は信越本線の碓氷峠67パーミル、スイスのレーティッシュ鉄道のベルニナ線でも70パーミルというから本家を上回っている。

車両にも工夫がされている。車輪とレールでは車輪の方が硬いのでレールが早く磨耗する。これを防ぐために通常の鉄道では油を使ってレールの磨耗を抑えているが登山鉄道は急こう配なので油は危険で、線路に水をまいて摩耗を低減している。

車両の前部には水タンクがとりつけてあり、私は偶然にもその水の補給作業を見る。

線路は山ひだを縫うように走り、最小曲線半径は 30m という。このような事例は世界でも類を見ないらしい。私には半径 30m と言われてもピンとこないが、半径 30m の場所に来ると 3 両編成の登山電車の先頭車両の側面がはっきりと見る事が出来る。先頭車両と最後部の車両の向きは 120 度も角度がつく。

確かにこんな光景を見たことがない。

建設に際して自然の景観を損なわず温泉脈にも影響を与えないという条件でトンネル掘削ができずに半径 30m の曲線になったという。



かくして鉄道技術者のロマンを乗せて箱根登山鉄道は 1919 年（大正 8 年）に箱根湯本から強羅までの運転を開始した。1927 年に小田急線が新宿から小田原まで開通し、箱根登山鉄道も小田原まで乗り入れた。

そしてその後は小田急が新宿からその線路を使って箱根湯本まで乗り入れようとするが、箱根登山鉄道の軌道（レール間の幅）はヨーロッパから技術導入したので国際標準軌 1435mm で小田急は狭軌 1067mm なので直接乗り入れられない。そこで 2 本のレールにもう 1 本追加し、片側のレールを共用する 3 本レールにして乗り入れた。今でも一部にその痕跡がある。

それほどまでこの箱根という地域は魅力があり、男たちのロマンをかきたてたのだろう。

そんなことは知ってか知らずか、今日もたくさん人が乗っている。そしてその半分は外国人だから日本の鉄道技術の素晴らしさを感じてもらえば嬉しい。

■ケーブルカーとロープウェイ

強羅駅を降りると人の流れに押されて隣接するケーブルカーの駅に入る。心太（ところてん）のように押し出された感じでケーブルカー乗り場の行列に並ぶ。次にどうするかを考える余地さえ与えてもらえないのは、ある意味考えるなど言われているようで好都合かもしれない。

日本国内でケーブルカーに乗るのは実に久しぶりで、子供のようにワクワクしながら 10 分間の旅を終える。そしてロープウェイに乗り換えて、標高 1044m の大涌谷駅を目指す。

大涌谷駅の手前で、何と雪が降ってきた。

隣に座っている金髪の白人女性に「It's snow」と言うと、彼女は「Really」と大そう驚いている。3月の日本は桜が咲いて暖かいと聞いて来たのかもしれない。

風も出てきてゴンドラが大きく揺れる。このロープウェイは強風で運航停止になることがあるので乗ってしまえば安心と思っていたが、よもやこんな場所で止まらぬように祈る。同行の彼女たちは雪に風に興奮しており、止まることなど何も心配していない。知らぬが仏とはよく言ったものだ。

ここは元々強風地帯なので強風対策としてゴンドラを左右 2 本のロープで吊っている。

大涌谷駅手前では硫黄臭がしてきた。そして視界が大きく広がり大涌谷を見下ろす絶景ポイントになる。ゴンドラの中では皆一斉に写真を撮り始める。

下界は晴れていたが、山は雪と風と硫黄臭だ。箱根の山々の歓迎は実に荒々しい。



大涌谷で名物の黒玉子を食べる。外は黒くて異様な感じだが中身は至って普通のゆで卵だ。

レストハウスの呼び込みのおじさんが熱心に勧めるカレーパンが美味そうなので、ビールもあわせて注文し、私たち 5 人はテーブルに陣取り軽い昼食をとる。

ここには車でも登って来られる。日曜日の昼ということで駐車場は満車、道路も渋滞している。そんな光景を横目に見ながら、ビールを飲んでカレーパンを食べるという簡素ながら贅沢？な昼食は気分がいい。車社会で生活する者には別世界の昼食になる。

■海賊船

さらにロープウェイで芦ノ湖畔の桃源台に降りる。ここにはバスターミナルもあり新宿行きのバスも出ている。ただ私たちの目の前には芦ノ湖が広がっており、そこには海賊船が浮かんでいる。もちろんフリー切符で乗れるので既にみんなの足は海賊船目指して歩き始めている。

まわりにいる外国人たちも同じ切符を持っている。まるで外国に来たような錯覚に陥る。



それにしてもどうして箱根で海賊船なのか。

気になって調べてみると、それはレジャー志向が高まる 1960 年代、当時の社長が渡米してディズニーランドを視察しアトラクションをみて海賊船がひらめいたという。和の箱根で海賊船は受け入れられないと多くの社員は思ったというが、いざ就航してみると子供たちに大人気で乗船申し込みが殺到したという。社長の先見性だろう。

しかしそれ以上に、海賊船が本格的なものだったからだと私は思う。

現在、海賊船は 3 隻あり、どれも定員 500 名以上の大型船だ。ヨーロッパの戦艦や客船をモチーフにして、船室の装飾も本格的だ。所々に銃などの武器が置かれている。

武器はもちろん本物ではないにしても、その本格的な様相が人々に受け入れられたのだろう。子供だましではなく、大人もだまされるレベル、それが箱根だ。

その背景には箱根山戦争と呼ばれる小田急グループと西武グループの激しい開発競争があったからで、ライバルがいると人間も企業も予想以上の力を出せる。その結果、東京からほど近いこの地域はいっきょに全国レベル、いや世界レベルの観光地になった。

今から約 3000 年前、箱根火山のカルデラ内にある中央火口の神山が噴火して山が大崩壊を起こし、カルデラ内にあった早川を堰き止めて芦ノ湖が生まれたという。

地球規模では、これは相当に新しい出来事だ。

湖岸に九頭龍神社がある。伝承によると人々を苦しめていた芦ノ湖に棲む 9 つの頭を持つ毒竜「九頭龍」を偉い上人が封印し、鎮静をはかるため現在の九頭龍神社を建立したという。

しかし約 3000 年前というと紀元前 10 世紀、古代エジプト文明の最盛期にあたる。ギザの 3 大ピラミッドはそれよりも 1500 年も前に造られていた。

エジプト文明の最盛期に九頭龍と言われても、納得できないのは私だけだろうか。

あまり真剣に考えてはいけないと思いつつ、ひょっとしたら九頭龍とは噴火の煙や溶岩を指していたのかもしれない。だとすると伝承は正しい。

■箱根町

海賊船を降りた箱根港近くには箱根駅伝ミュージアムがある。その隣の道路わきには往路のゴールと復路のスタートを示す柱が立っている。

同行の彼女たちは喜んで記念撮影をしている。そしてこの道路がお正月に選手を迎い入れてテープを切る地点だと教えて、「あ、あのシーンだ！」興奮さめあらし様子だ。



箱根といえば関所だ。それは箱根港近くにある。

江戸時代初期に箱根に関所をつくるにあたり箱根の住民が反対したために、箱根のはずれ京都寄りのこの場所に関所を設置したという。そして関所のある方を箱根と呼ぶようになったのでそれまでの箱根には「元」を付けて元箱根に名前を変えたということだ。

だから箱根港近くに関所があり、元箱根には箱根神社や古い旅館が多い。

名前には歴史やエピソードがある。

ついでに書くと、この箱根の関所までが関東だ。関東の「関」は箱根の関所を意味するので、この関所より東を関東と呼ぶ。

関西も同様だが、時代とともにいくつかの関がある。まあ分かり易いのは関ヶ原の関だろう。

料金所があり有料のようになっている。私の記憶では関所を通過するだけならば無料のはずだが、よく見るとそれは詮議する部屋などの付帯施設を見学する料金だ。

これはひどい。知らない人はきつとお金を払ってしまうだろう。同行している仲間にも以前来た時に料金を払った者もいてとても悔しがっている。

まあ、しかし関所とは通行税を取るところだったので、そんなものなのかも知れない。

■かつての箱根離宮

箱根の関所跡の隣にある箱根恩賜公園を訪れる。ここは関の東側で関東にある。

箱根には著名人の別荘がたくさんあるが、天皇家の別荘も箱根にあった。ただ天皇家の場合は別荘と呼ばず離宮と呼ぶ。

箱根離宮は1886年（明治19年）に建てられ、以後使われていたが1930年の北伊豆大地震で建物が倒壊したので、それを契機に神奈川県に管理が移り箱根恩賜公園となっている。

この公園は芦ノ湖の湖岸に突き出た半島全体が敷地になっている。半島全体が小高い山で、その頂上に昔の離宮に模した2階建ての洋館がある。目の前には芦ノ湖が広がり、箱根の外輪山の向こうには富士山を臨めることができる。

公園内に展望ポイントがあり、全てを見ても1時間ほど歩いて回れる。あまり観光地として紹介されていないので観光客は少なく、いわゆる穴場だろう。公園は無料開放されていて、県立なのでメンテナンスも良い。もちろん洋館にも無料で入ることができる。

休憩をかねて洋館の喫茶コーナーでお茶にする。

残念ながら本日は富士山を臨むことはできないが2階バルコニーから写真を撮る。秋から冬の時期に来れば紅葉とあわせて富士山の雄姿も見ることが出来るだろう。ここが箱根の一等地であることが分かる。

彼女たちも皇室気分を味わえて満足そうだ。添乗員としては連れてきた甲斐があるというものだ。



■塔ノ沢の老舗旅館

芦ノ湖畔から宿のある塔ノ沢に向かおうとするが、日曜日の夕方途中からバスは大渋滞をしている。渋滞情報とフリー切符を上手く使い、途中から電車に乗り換えて旅館にたどり着く。ここで作戦を間違えると1時間は余分にかかるだろう。

本日の宿「一の湯本館」は木造4階建てで数寄屋造りのなかなかのものだ。私は旅館の風情や雰囲気の評価する術として廊下を意識して見るようにしている。木の階段をギシギシ登っていくと2階、3階に客室があり、客室の入口から軒が廊下に出ている感じがとても良い雰囲気をかもし出している。

早川が宿の周りをコの字に曲がって流れているのでほとんどの客室から溪谷の景色と川のせせらぎを気持ち良く感じることができる。

この宿の温泉はもちろん良いが、風呂で驚くのは洗い場である。通常どの旅館でも洗い場は鏡があつてお湯や水の出るカランがあるが、この旅館の洗い場にはそのカランがない。鏡の手前にある温泉槽から桶で湯を汲んで洗ったり、かけ湯にしたりする。

昔は蛇口というものがなかったので、このような温泉槽になったのだろう。こんなところにも江戸時代を感じることができる。それは湯量が豊富でないといけない仕掛けだ。



この宿のことは旅行記「塔ノ沢温泉 2018」で詳しく書いている。

夕食の時には宿泊客のほとんどが食事処に現れる。全部で 10 組くらいだろうか、日本人客は私たちともう一組だけ、あとは外国人という完全アウェー状態だ。その外国人も欧米、中国、東南アジア系と国際色豊かだ。

働いている女性従業員に話を聞く。彼女はベトナムからやって来てまだ 6 ヶ月というが、日本語も普通に話せる。他のテーブルに行くと英語や中国語で接客している。

日本が大好きだという彼女は 22 才、本当に恐れ入ってしまう。こういう若者たちが楽しく働いている姿は実に嬉しい。

夕食が終わり、私の部屋でまた飲み会が始まる。夜も更けていくが、気持ちだけ女子高生と化したおばさんパワーは留まることを知らない。今思うと、酒が飲めない高校時代は平和だった。

■ここは外国か！？

翌朝、体には多少アルコールが残る中、バスで再び芦ノ湖を目指す。本日は晴れているので芦ノ湖から富士山を綺麗に見ることができるはずだ。

バスに乗って驚くことは「ここは外国か！？」と思わず叫んでしまう。それほどにバスは外国人が多く乗っている。昨夜の旅館の夕食の完全アウェーの状態と同じだ。

私の隣に座っている外国人に訊ねると、彼はフランスからやってきて、日本を、そして箱根を存分に楽しんでいるという。温泉も好きで日本食では刺身が大好きだという。

昨今、日本に個人旅行で来ている外国人はほとんどがリピーターで、日本人よりも日本に詳しい。この人たちともう少し話をしていけば、日本や箱根について多くの質問が来るに違いない。

このような完全アウェー状態なので、仲間のひとりが隣に座った人に英語で話しかける。相手も片言の英語で返してきたと言うが、話しているうちにお互い日本人だということが分かったというから傑作だ。

日本に来る外国人観光客、いわゆるインバウンドは昨年 3000 万人を超え、2020 年は 4000 万人になるという。ここ 20 年ほどで 10 倍になっている。この数字からすれば外国人観光客が増えているのは理解できるが、箱根でこんな現実を目の当たりにすると肌で感じることになる。

そして私たち日本人も外国にもっと行くべきだと強く思う。日本に閉じこもっているのはそれこそ島国根性が身についてしまう。

■箱根神社

芦ノ湖畔の森の中にたたずむ古い立派な神社が箱根神社である。芦ノ湖に突き出て鳥居が立っており、そこから参道がまっすぐに延びて、いくつかの鳥居をくぐって本殿にたどり着く。この湖に突き出た鳥居こそが正面玄関なのだが、一般の参拝者はその参道に途中から入る。

箱根神社の境内には、例の九頭龍伝説の九頭龍神社の新宮もある。

高い木々が茂っている中、参道には朱色の鳥居が絶妙なバランスで配置されている。その演出によってかもし出される神社特有の張りつめた空気感がたまらなく好きだと、同行の仲間が言う。

私もそう思う。その空気感を味わったお礼に賽銭を投げ入れると言っても過言でない。



■リベンジの 2 日目

今日は空が晴れ渡り富士山がよく見える。私たちは再び海賊船に乗って、昨日と同じコースを逆行することにした。これも 2 日間有効のフリー切符のなせる業だろう。

海賊船も昨日と同じでは芸がないので、今日は 400 円の追加料金を払い特別室を利用する。天気が良いので多くの乗客はデッキに出ており、数十人は座れる特別室はガラガラで、ほぼ貸し切り状態で芦ノ湖遊覧を満喫する。

昼食にコンビニで買い込んだサンドイッチとビールを特別室のソファで美味しくいただく。芦ノ湖の湖上で富士山を見ながらビールは格別にうまい。

再びロープウェイに乗る。昨日の雪とは打って変わって、青空と富士山と芦ノ湖が見事な共演を見せてくれる。

フリー切符を使った気ままな箱根の旅も終わりになろうとしている。



■箱根フリー切符とは

今回利用した箱根フリー切符は、正式には「箱根フリーパス」という。小田急が販売しており小田原以西の箱根エリアの電車、バス、ケーブルカー、ロープウェイ、海賊船が乗り放題で、期間は2日間と3日間がある。小田原までの小田急線区間やロマンスカーの切符も割安で一緒に購入できるので今回のような集合が出来る。

ただし乗れるのは小田急グループの乗り物だけで、それ以外の、例えば西武グループが運営するバス、遊覧船では利用できない。箱根山戦争の結果、西武系の乗り物もそれなりに多いから注意が必要だ。

■旅の記録

旅行は2019年3月17日（日）～18日（月）、特に予定を立てない気ままな旅だった。費用はひとり約2万円、箱根1泊4食付きアルコールも交通費も込みの旅にしては安い。ほとんどは添乗員役の私がまとめて払ったもので、以下に示す。

・宿泊代（1泊2食、お酒含む）	56650円	1人当たり 11330円
・持ち込みの酒、つまみ	2854円	1人当たり 570円
・箱根フリー切符+片道ロマンスカー	31000円	1人当たり 6200円
・ロマンスカーの缶ビール	1100円	1人当たり 220円
・1日目昼食（カレーパン、飲み物、黒玉子）	4620円	1人当たり 920円
・2日目昼食（海賊船持ち込み）		各自約 500円